

ナザリック絶対守るマ  
ンなモモンガ様

dai8722

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者なりの解釈したモモンガ様が支配者ムーブするだけの誰得小説。

作者の処女作につき右も左もわかりません。

超絶駄文、設定ガバそれでもかまわないという心優しい人は読んでやってください。

とりあえず作者が書きたいモモンガ様がかけたら終了するけど気分を書いてるからすぐ終わるかも。

# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| モモンガ様決意する    | 1  |
| モモンガ様動く      | 8  |
| モモンガ様丸投げする   | 18 |
| モモンガ様がアインズ様に | 29 |
| モモンガ様中二病発症す  | 41 |
| モモンガ様想われる    | 52 |
| モモンガ様冒険者になる  | 65 |
| モモンガ様指名される   | 77 |



# モモンガ様決意する

「我らの忠義すべてを御身に捧げます」

「「「「捧げます」」」」

俺はそんな我が子の様子を見降ろしながら今度こそ絶対に自分の「居場所」を守り抜くことを決意した。

~~~~~

思えば俺の人生とはいったい何だったのだろう。

西暦22世紀の地球に「鈴木悟」として俺は生まれた。

俺の生きたリアルでの空は常に重い雲に覆われ青い空、蒼い海、碧い緑などデータでしか見聞きできないものとなっていた。

そんな崩壊寸前な地球に生まれアークロジの外の貧民の両親のもとに生まれた。

両親は俺を愛してくれたしそんな両親が大好きだった。

その両親もそんな世界の犠牲となり俺を残して早くに亡くなった。

両親は俺を小学校までは卒業させてくれたので何とか職に就くことはできた。

が、その会社でも社会の歯車、悪く言えば会社のために文字通り身を捧げさせられた。

俺は世界が憎かった。だがウルベルトさんのように今の社会に真つ向から反抗する勇気もなくなつただけ逃げる先を見つけたかった。

そんな時に仮想空間「YGGDRASIL」に出会った。

そこは圧倒的な自由度でプレイできることで有名であると聞き、お試してプレイを試してみた。

正直逃げれるならどこでもよかった。

しかしそこでも異人種を選んだことにより人間種からPK的にされ仮想空間でさえも食い物にされる我が身がひどく可笑しかった。

今思えばあの時にすでに俺はおかしくなっていたのかもしれない。

でもそんな俺を救ってくれた純白の騎士と出会った。

彼はことなくそみたいな世界でも自分の正義を貫いていた。

彼の名前はたちみーさん間違ひなく俺の人生の、いや命「心」の恩人である。

彼に連れられて出会つた仲間たちは誰もが皆気がいい奴らばかりだった。

9人で始まつたクラン―ナインズオールゴウン―はまさに俺の探していた「居場所」だった。

しかしだんだんその規模が増えてきてギルドを結成しようとなつたとき正直俺は少し嫌だった。

まるで自分の「居場所」が変わってしまったのではないかと思ったからだ。

だから皆からギルド長に指名されたときはすごくびっくりして嬉しかったけど自分には無理だと思った。

しかし当時の結成メンバー全員からの指名により仕方なくギルド長を受けることにした。

自分の「居場所」がなくなることが何よりも恐ろしかったからだ。

自分で言うのもなんだがそんな俺の心境は誰にも気づかれない事はないと思おう。

俺は必死にギルド長として振る舞いギルドメンバー達が離れないようにギルドでの調整役に徹した。

最盛期にはギルドメンバーは41人となりギルドランクも9位となりユグドラシルでは知らぬものはいないDQギルドとしてその名を轟かした。

そんなギルド「アインズ・ウール・ゴウン」は間違いなく俺の世界で唯一の居場所だった。

しかしあるときにギルドメンバーがユグドラシルからの引退を表明した。

はじめは一人だけだったし彼にもリアルな生活があるからだと自分を納得させて見送った。

だが時間が経つにつれて引退するメンバーはどんどん増えていった。

最終的にはギルドメンバーは自分を含めて4人しか残らず残りの3人とは最後に口グインしたのがいつかとも思えないほど会っていなかった。

だからユグドラシルの最終日、最後に皆で集まらないかといった内容のメールを送って、ヘロヘロさんがログインしてくれた時は本当に嬉しかった。

しかし、ログインしてくれたのはヘロヘロさんだけだった。

引退したメンバーの中にはアカウントを削除した人もいたので全員集まらないのは当たり前だ。

俺の恩人のたつちみーさんだつてその中の一人だ。

俺は最終日に「アインズ・ウール。ゴウン」のメンバー皆と終わりを迎えることで生との区切りをつけようと考えていた。

だがその希望は打ち砕かれた。

そんな俺の唯一の「居場所」がほかのギルドメンバーにはその程度のもだったことが非常にショックだった。

世界はどこまでも俺に残酷だった。

俺に希望を与えてそのうえでそれを俺から取り上げるのだから。

こんなことなら初めから知らないほうが幸せだった。

そんなくならない最後を迎えようとして、目を閉じ、少しの後違和感に気づいた。



なぜか俺の意識はいまだこの仮想世界の中にあつたからだ。

いや本当にこれは仮想世界なのか。

俺の目にやけにリアルに描写されるオブジェクト。

流暢に会話をするキャラクター達。

先ほどまでどうでもいいとすら思っていたのに俺はなぜか状況を確認しようとして――純白のドレスに身を包み絶世の美女の顔に不釣り合いなヤギのような二本の白い角を頭から生やし背中から一対の黒いカラスのような羽をもつ淫魔――アルベドに命じ一部を除いた各階層守護者を6階層に集めさせていた。

そこで分かったのはなぜかわからないが自我を持つようになったNPC達と明らかに仮想空間とは違うリアルとしか思えないしかりありえない状況。

なぜなら俺はユグドラシルでのアバター“オーバーロード”での姿のままだったからだ。

階層守護者が集まる前に試したがどうやら俺はユグドラシルで使用していた魔法がそのまま使えるらしい。

しかしカーソルなどは現れず頭の中で思えば使えた。

おそらくだがスキルも使えるのだろう。

しかし、これは使えるすべての魔法、スキルを覚えている俺だからいいが、スキル名

等をカーソルで調べることができない今、魔法やスキル名を忘れた場合はどうなるのだろうか。

そうこうしているうちに階層守護者たちが集まり突然アルベドが各階層守護者に忠誠の儀をとか言いだした。

~~~~~

ここで場面は冒頭に戻るが、何が何やらわからないがとりあえず俺の印象を各階層守護者たちに確認したところで俺は気づいた。

ああ、こいつらも俺と同じ捨てられた仲間なんだなど。

どうしてかはわからないがここはユグドラシルが現実となった世界と推察する。

道中彼ら以外のNPCとも会話をし、どうやらこうして自我を持つ前の記憶もあることは確認している。

となればギルドメンバー達がここ数年ログインしていないこと、自分たちの目の前に姿を現してくれないことも理解しているはずだ。

そして彼らは口には出さないが、どうやらギルドメンバー達に捨てられたとは考えていないらしい。

いや、もしかした捨てられたと気づいているが、認めたくないがゆえに現実逃避しているだけなのかもしれない。

ゲームのNPCが現実逃避とはお笑い草だが。そんなNPC達は正に俺と一緒に死んだ。

ギルドメンバー達に生み出されて、「居場所」を与えられて、そしてそんな自分たちの「居場所」から捨てられる。

世界に生み落され、求めた「居場所」をみんなで作り、そのギルドメンバー達に捨てられた、

そんな俺と一体どこに違いがあるというのだろう。そう考えると俺の友人たちの作り出したNPCではなく彼らの息子、娘であり俺が保護すべきものたちだと強く認識した。

俺は決めた、訳は分からないがこの現実がまだ続くなら今度こそこの現実が続く限り自分の手でこの「居場所」を守り抜くことを。

リアルでは反抗しなかった俺の最初で最後の世界への反抗。

俺の「居場所」を犯すものに対しては例えどんな理由があろうと、誰だろうと徹底的に排除することを。

この日自分の小さな王国を守るためだけに世界に反抗する全ての死の王がここに生まれた。

## モモンガ様動く

俺はまず我が子の中に反抗者がいないか確認することから初めた。

自分の味方だったものが自分を裏切った時の衝撃を俺は嫌というほど味わった。

そんな思いをかつての友たちの残した、もはや自分の息子、娘とも呼べるものたちに味合わせたくなかったからだ。

だからいた場合はどんな手段を使っても彼らを更生させるつもりだった。

とりあえず現状では問題はなさそうだが本当のところどう思っているかはわからない。

アイツにでも任せるかと頭の隅で考えたところでまず現状を確認するところから始めた。

まずここは本当にユグドラシルが現実になった世界なのか。

可能性としては0%ではないというものでしかないがユグドラシルⅡが始まったとも考えられる。

しかし触覚や嗅覚を感じるなど、明らかに法を犯しているような現状、あり得るとは考えづらい。

色々と調べるためにも絶対に信じられる味方を一人自分の傍につける必要がある。

現状自分の味方かどうかの保証はないがこれに關しては信じるしかない。

自分のガイコツとなつた指にはめられたリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを起動し宝物庫に待つ我が子のもとへと跳んだ。

宝物庫へと跳んだ俺は入口の暗号をど忘れていたのでヒントを出すことにした。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」

そう叫ぶと何もない闇にラテン語が浮かんでくる。

「確か、かくて汝全世界の栄光をわが物とし暗きものは汝より離れさるだろう」だったか」

そう言えば闇が晴れ通路が現れた。

武器などが壁に埋められた通路を通つた先に、大きな空間が現れそこに一つだけソファアールぽつんと置いてあつた。

そこで俺を待っていたのはタブラさんだった。

一瞬パニックになりそうになつたがなぜかすぐにその衝動が沈静化された。

その症状にもパニックなりそうになつたがどうやらオーバーロードの種族特性である弱体化無効のパスシブスキルではないかとあたりをつける。

ますます人間でなくなつたことに疑問がないわけではないが、なぜだかこの胸の奥底

から湧き出る世界に対する怒りだけは常に湧き出てくるので良しとした。

「もうよいパンドラズアクター」

そう俺がそういうとタブラさんの形をしたものは旧ドイツ軍の軍服を着た埴輪のような3つの穴の顔を持つ物へと変化、いやこちらが本来の姿なので戻ったというべきか。

彼の名前はパンドラズアクター。

彼は俺が作成した唯一のNPCでナザリック地下大墳墓の宝物殿の領域守護者である。

俺が作成したので他のNPCより思い入れがある。

何よりナザリックでも最上位に位置する知恵者と設定したその頭脳は今回の内部調査には必須であるし、またドツペルゲンガーという種族からしても他人の内面を推理する能力にたけるものと思われる。今の俺に必要な要素を持った存在だ。

「ようこそおいでくださいました。私の創造主たるモモンガ様!!」

そういう俺が中二病真つただ中で作ったNPCであることを失念していた。

どうやら彼の着ているかっこいい軍服に見惚れてしまい、彼の設定を一瞬頭から忘れていたらしい。

「ところで今回はどのような用件でしょうか。」

「ああお前の力が必要になったのだ、力を貸してほしい。」

そういつたら体を微妙に震わしながら長いが4本しかない指を3本だけ立てながら右腕を突き上げた。

「ンン喜んで私の創造主モモンガ様。」

そこで私はパンドラズアクターにソファーに座るように勧め、現状を説明して考えを聞いてみた。

「というわけで私は違和感を覚えて周辺を調べた結果どうやらここはナザリック地下大墳墓が存在したヘルヘイムにある毒沼の周辺ではなく草原であることを発見した。現状を詳しく調査し現状を把握するにはナザリックに存在する僕達を使う必要があるのだが、ほかのギルドメンバー達が不在の今、彼らが生み出した僕達が本当に素直に私に従ってくれるのか疑問なのでそれも含めてお前に調査してほしい」

「承知いたしました、モモンガ様。私はずっとこの宝物殿におりましたので違和感を覚えることはありませんでした。が、モモンガ様が心配するナザリックに属する全てのものがモモンガ様に反旗を翻す可能性は低いかと思われませう。」

「それをお前に確実に調べてほしいのだ」

「Wie mein Gott sagt。モモンガ様からの任務完璧に遂行することをお約束いたします。」

「どうやらパンドラズアクターは中二病の俺が設定した通りであることが確認できた。

そしてどうやら俺を創造主として認識絶対服従であるようである。

「それではまずこの奥にあるワールドアイテムをお前にも一つ授けようではないか」

「誠にございますか!!このナザリックの至宝とも呼べるワールドアイテムをわたくしごときに下賜くださるというのですか」

「この危険な任務に一人で当たるにはワールドアイテムは必要であろう。私の信頼の証と思つて励むがよい」

「Danke dir, mein Gott. そしてこのような榮譽に拝していただきさらに要求するわがままをお許しください。」

ピク、と存在しない眉毛を釣り上げたような気がしたモモンガ

「よい、発言を許す」

「ありがとうございます。それでは今後モモンガ様を父上と呼ぶことをお許しただけないでしょうか」

そこでモモンガは再度種族特性の精神異常から復帰するほどの衝撃を受けた。こいつは今父上といったのか?この俺を?

「許す、しかしほかの者の前でそう呼ぶことは許可できない。私と二人の時のみ許可する。」



「おお!!感謝いたします父上」

そうしてなぜかチェリーのまま息子ができることになったが、ナザリックの僕すべてを息子と娘とすることに決めた今となつては今さらだ。

それにそうすることでパンドラズアクターの忠誠が買えるなら安いものだという打算もあつた。

私はパンドラズアクターにワールドアイテムである山河社稷図とリングオブアインズ・ウール・ゴウンを装備させ宝物殿からでてアルベドに会いに行った。

アルベドは現状を把握しようとナザリックの僕達に指示を玉座の間で作業していた。

「アルベドよ」

「これはモモンガ様。後ろのものは何者ですか。」

「うむ、お前に紹介しようと思つてきたのだ自己紹介するがよい。」

「お初にお目にかかります、美しいお嬢様。わたくしはモモンガ様より宝物殿の領域守護者を拜命しておりますパンドラズアクターと申します。以後お見知りおきお願い申し上げます。」

その瞬間アルベドの目の瞳孔が猫のように縦に変化した。

「存じています。唯一モモンガ様が手ずから作成したNPCであると。」

「うむ、今後のナザリックの運営について話し合おうと思つてまずはお前にパンドラズ

アクターを紹介しようと思ってな。」

「お心のままに」

そしてそつと頭を下げたアルベドであるがその顔は嫉妬に歪んでいた。

モモンガ様が一番に私を信用してくだされば私を連れてパンドラズアクターに会いに行くはずであるのに、現実にはパンドラズアクターを伴ってわたくしの前に現れた。

これが意味することとはモモンガ様はわたくしよりもパンドラズアクターを信用しているということ。

ただでさえモモンガ様に手ずから作られたというだけでも妬ましいというのに階層守護者統括であるわたくしを差し置いてナザリックの運営に関する問題に一番に相談されるとは。

嫉妬で殺したくなるほどアルベドには屈辱であった。

「それではパンドラズアクターと協議しようと思います。」

「待て、その前にデミウルゴスも含めた4人で話そうと思っっている。そこでこれをアルベドに渡そうと思う。」

そういつてモモンガはリングオブアインズ・ウール・ゴウンをアルベドに差し出した。

「感謝いたします。」

そういつてアルベドは恭しくモモンガの差し出した指輪を両手で包むように受け

取った。

そして表面上は取り繕っているがその心中は狂喜乱舞していた。

アルベドはアインズ・ウール・ゴウン一の設定魔であるタブラ・スマラグディナに作られたNPCである。

その設定に記載されるフレージャーテキストは一文字の隙間もなくびつちり記載されていた。

そこには最後に「ちなみにビッチである」と書かれる通り清純な乙女にしてビッチというタブラ・スマラグディナの性癖が現れていた。

しかし、実はこのアルベドはタブラ・スマラグディナにアインズの正妻として作られたという面も持っていた。

タブラ・スマラグディナはモモンガにばれないように直接的にはそんな文は一文たりとてフレージャーテキストには記載しなかった。

しかしギルドメンバー最年長であり大学教授でもある死獣天朱雀と組んでアナグラムなどの暗号を駆使してフレージャーテキスト全体でモモンガの正妻であるという意味を持つようにフレージャーテキストを組んでいた。

このまったく意味のない自己満足でしかないことを非常に高度に達成してしまうのがギルドアインズ・ウール・ゴウンのメンバーである。

たったの41人でギルドランク9位というのは伊達ではないのだ。

とにかくモモンガを愛しているアルベドはモモンガから指輪をプレゼントされたという事実を持ってして歓喜に打ち震えていた。

そして自身に殺気を放ったアルベドやモモンガから指輪をもらって体を震わすアルベドをみてアルベドのモモンガに対する思いに想像ができるほどにはパンドラズアクターは優秀であった。

「それではわたくしはこれよりデミウルゴスをこちらに連れてまいります。」

「うむ、それではここではなく9階層にある会議室の方に頼む」

「承知しました。それでは失礼いたします。」

そういつてリングオブアインズ・ウール・ゴウンを起動したアルベドはおそらくデミウルゴスが待機するであろう7階層に転移をした。

「父上」

「うむ、どうした」

「おそらくアルベド殿が父上を裏切ることはないかと思われます。しかしその思いが暴走する可能性はありアルベド殿は十分に管理する必要があるかと思われます。」

「一体どういうことだ」

「はい、まず間違いなくアルベド殿は父上に恋愛感情を持つているかと。端的に言つて

父上を愛していると思われませう。」

「な?!馬鹿なタブラさんからはそんな話聞いたことがない」

「今のわずかなやり取りでも確信してしまうほど父上を見るアルベド殿の目は熱が必要以上にこもっていました」

「そうかお前が言うのならその通りなのだろうが、正直半信半疑ではある。今後はお前の忠告通りアルベドのその辺の感情に注意してみよう」

「忠告をお聞き入れくださり感謝しております父上」

「ふふ、息子の忠告なら聞くのは親としては当然だと思ふがな」

それを聞いたパンドラズアクターは顔を少し上に傾けそのモモンガの言葉に歓喜に打ち震える。

「それでは会議室に移動しようか。」

そういつてモモンガとパンドラズアクターはリングオブアイन्ズ・ウール・ゴウンを起動して会議室に転移をした。

## モモンガ様丸投げする

「モモンガ様、デミウルゴスを連れてまいりました。」

アルベドは会議室に入る前にノックをして声をかけてから部屋に入室してきた。

その横には赤いストライプのスーツを着た髪型オールバックにして小さな丸眼鏡をかけた耳のどがったビジネスマンのような細身の男が控えていた。

デミウルゴスは最上級<sup>アーチ</sup>の悪魔<sup>デビル</sup>であり、ウルベルトさんに作られたNPCである。

「モモンガ様がお呼びとあり参上いたしました。」

「うむ、忙しいところ申し訳ないな。」

「何をおっしゃいます。このナザリツクにおいてモモンガ様のご命令以上に優先される事柄などございません。」

「そうか、それでこいつはパンドラズアクター宝物殿の領域守護者を任せているが今回の事態に三人で協力してもらうためにここに呼んだ。」

「お初にお目にかかります。私パンドラズアクターと申します。以後よろしくお願いいたします。」

「私はデミウルゴス。第7階層の階層守護者を任されています。こちらこそよろしくお

願いますよ。」

「それでは改めて、わたくしはアルベド守護者統括の任を至高の御方より任されてます。」

挨拶が終わったところでモモンガは3人に席に着くように促したが、どうしたことか三人とも席に着くのを執拗に拒むのである。

どうやら3人がいうには至高の御方の席に着くのは恐れ多いとのこと座れないというのだ。

ただ会議をするのに俺だけ座って3人に立たれていると話しづらいので何とか創造主の席に座る栄誉を与えろということを決着をつけようとするとさらに恐縮して話が進まないためやりづらくはあるが俺の席にほくほく顔で座るパンドラズアクターを除いて2人は立ったまま会議を始めた。

ちなみにその際アルベドはその美しい顔が般若となるくらいしかめてパンドラズアクターを睨んでいたが。

種族特性の精神鎮静化が働かなければ一緒の空間にいるのが恐ろしいほどの殺気で肌があれば鳥肌が立っていたぐらい怖かった。

「それではこのナザリック最高の知恵者である3人にはこのナザリックの運営と現状ナザリックが置かれている状況の把握を務めるための情報収集などの役割分担を決めて

円滑な運営をしてほしい。知つての通り現在ギルドメンバーは私だけでありほかのメンバーはここにいない。そこで我が友が残した僕達の力を貸してほしい」

「何をおっしゃいます。我々は至高の御方に作られた者ども。至高の御方のお役に立つのは当たり前でございます。モモンガ様が我々に欲しいなどと協力を要請する必要はございません。是非ともご命令ください。ナザリックの全僕がモモンガ様のために命を懸けて遂行いたします。」

「素晴らしい。お前たちがいればこの困難な状況も必ず乗り越えられると確信する。しかし命を懸けられるのは困るお前たちはわが友の残した息子・娘であるそのお前たちの命が失われたとわが友に知れたら私は彼らに顔向けすることができない。軽々しく命を懸けるなどと言うな」

「おおーなんと慈悲深いお言葉でしょうか。我々僕一同はモモンガ様に絶対の忠誠を持つてその慈悲深さにお答えさせていただきます」

自分が庇護する子供たちに自分が命を救われては本末転倒であるので軽々しく命を懸けるなど注意するが本当にわかっているか怪しい回答をデミウルゴスがするがとりあえず次の話をするために話を進める。

「とりあえずナザリックの内政については今まで通りアルベドに任せたい」

「は、お任せください。必ずそのご期待に沿える働きをいたします。」



「デミウルゴスは外の情報収集の責任者を任せたい」

「承知いたしました。完璧なる働きを持ってご期待にお答えいたします。」

「パンドラズアクターにはアルベドとデミウルゴスの2人のフォロワーをお願いしたい遊軍としてな。私の直轄として秘書兼護衛としてプレアデスを置くがパンドラズアクターにもプレアデスへの命令権を与える。尚セバスは依然プレアデスのリーダーとするのでその上の立場ということで頼む」

「承りました。モモンガ様」

「内はアルベド、外はデミウルゴス、その2人が見落としてしまう部分などはパンドラズアクターが遊軍として調整をしてほしい。尚動かせる人員は限られているので細かい人員配置については3人で協議して私に報告してほしい。問題があれば私が直接指導するが基本的にお前たち任せる」

「これほどの大役を我々僕にお任せくださるとは、感謝の極みにございます」

「そのご期待に恥じぬ働きをお約束いたします」

「それではデミウルゴスお前にもこれを授けよう」

そういつてモモンガはリングオブアイنز・ウール・ゴウンをデミウルゴスの前のテーブルの上に置いた。

そしてわずかにアルベドの顔が濁つたのをパンドラズアクターは見逃さなかった。

「これは!?!このような貴重な品いただくことはできません」

「デミウルゴスよく聞くがよい、このナザリツク地下大墳墓はこのリングオブアインズ・ウール・ゴウンがなければ転移ができない。外の情報収集するために出入りの激しいお前がこれを持つことは必須だ。それでも納得できないなら報酬の前渡しだとも思うがよい。理解したならその指輪を指にはめ我が命を遂行するのだ」

そういつてデミウルゴスに強制的に指輪を受け取らせて任に当たさせた。

「これほどの宝に値するほどの働きを改めてモモンガ様に誓います」

「うむ、ちなみにここにいる3人にはすでに配布済みである存分に私のために働くことを許す」

「「は!!」」

「それでは10階層の様子を確認するために私は一度退室する。3人で協議し細かい内容はそれぞれの責任者である3人が私に書類で報告するように。3人とも我が私室と執務室に入室する権利をあたえる」

「「お心のままに」」

そうしてモモンガが退室後に3人は協議を始めた。

「さて、改めてよろしく頼むよ2人とも」

「ふん、本来ならわたくし一人でも十分だけどモモンガ様のご期待に応えるためには

しょうがないわね」

「私は普段表に出ませんが今回はわが創造主の勅命。全力を持ってフォローさせていただきます。いただきます!!」

「ああ、ところでパンドラズアクター君に聞きたいことがあるのだがいいかな。」

「ええ！もちろんですとも！」

「私が知る限りではここ数年ナザリックに姿を御見せくださった至高の御方はモモンガ様のみ。その際このナザリックの運営は全てモモンガ様が一人でなさっていたと記憶していたのだが。どうして突然モモンガ様は我々3人を呼び出して突然我々に榮譽ある使命を拝命くださったのかな。もちろんこれほど名誉なことはないし今後もぜひそうあるべきだと思うがね。」

「はい。先ほど久しぶりにお会いになった際にモモンガ様はおしやつておりました。ナザリックの僕は全て我が友の残した子であると。すなわち我が息子、娘も当然。そんなものたちを庇護するのも希望をかなえるのも父たる我が役目であると」

「まさに恐れ多いとはこのことだね。我々僕のことを子供だなどと、あまつさえお仕える方に庇護されるとは僕としては恥じるしかないとはいえ、この体の底から湧き上がる気持ちはどうしたことだろう」

そういつてデミウルゴスは眼鏡を左手で抑えながら体を小刻みに震わせている。

ちなみにアルベドはモモンガに娘といわれたことでシヨックを受けていたが、実の娘でないのだから問題ないなどと別のことに思考を割いていた。

とりあえずパンドラズアクターの答えに納得したのか3人は協議を再開しあとは各々で細かい調整をしてからモモンガに報告することで別れることとなった。

そんな中パンドラズアクターは分かれる前にアルベドに声をかけていた。

「アルベド様少しお時間を頂けないでしょうか。」

「何かしかこちらはあなたにこれ以上話すことはないのだけれど」

「少々大事な話になりますゆえ2人でお話したいのです」

「何よ、早く話しなさい」

「それではアルベド様はモモンガ様のことをどうお考えでいらつしやいますか」

「そう先ほどの6階層での階層守護者の集まりにあなたはいなかったのだわね。面倒くさいこと2度とは言わないのでよくお聞きなさい。至高なる御方のまとめ役にしてザリック地下大墳墓の絶対なる支配者」

そして私の愛しいお方と心のなかで付け加える

しかし目の前の埴輪は表情がうかがえない顔でその心をあつさり口にする

「そしてアルベド様の愛するお方といったところでしょうか？」

「な!!?」

自分の心をあつさり口にされて動揺するアルベド

「もう一つお聞きしたいことがあります。モモンガ様を除いた至高の御方40人のことはどう思っていていらっしゃるのでしょうか」

その言葉を聞いた瞬間ほんのわずかではあるがアルベドの纏う空気の温度が下がり目からは色が失われた。

常人なら気づかないほどのほんの一瞬だがその心情を推察するにはパンドラズアクトーには十分であった。

「やはり、アルベド様はほかの至高の御方を恨んでおいでなのですね。」

「なぜそんなことを思うの？私への誹謗中傷ならやめてくれないかしら。いくらモモンガ様が手ずから作られた僕とはいえ許せる発言と許せない発言があるわ」

「何簡単な推察ですよ。デミウルゴス様がおっしゃったとおりここ数年モモンガ様以外の至高の御方はここナザリックにお姿を現してくださいさらなかった。その間モモンガ様は一人でこのナザリックを一人で支えておいでくださいました。そしてその傍にいたあなたはモモンガ様のお姿をずっと見られていたことでしょう。モモンガ様の一人でナザリックを支える痛ましい苦悩するお姿をね」

「何を。」

「できることなら私がおそばにいてモモンガ様をお支えしたかった。しかし私は宝物殿

の領域守護者。常にナザリックの支配者の傍にいてそれを補佐するよう定めて作られたあなたとは役割が違います。あなたは見てきたのでしょうか。モモンガ様の見るに絶えない悲痛な表情をこの数年間」

その言葉を聞いた瞬間アルベドのなかで何かが切れた

「ええそうよ。私はこの数年間モモンガ様のおそばにいてそのお姿を見続けていたのよ。あのくそつたれの40人がモモンガ様を見捨ててこのナザリックから去っていくときの悲しいお顔を。そして私は気づいてしまったのよ。至高の御方たちは私たちナザリックの僕とモモンガ様を見捨てたのだと。私の愛しいモモンガ様をあのような悲痛な表情にさせたあの40人は絶対に許さないと。」

「やはりそうでしたか」

「何モモンガ様にこのことを報告でもするつもり。それなよ」

「いえ、私はむしろあなたの応援しましょう」

「へ?」

思わずアルベドからこの抜けた声が出る。

「勘違いしてほしくないのですが我が願いのすべては我が創造主モモンガ様の幸せのため。そのためなら私はほかの至高の御方を害することすらも厭いません」

「なにを——」

「私も同じなのですよ。たまに宝物殿にお越しになるモモンガ様の寂しそうなあの姿。あのようなお姿はもう見たくありません。モモンガ様を幸せにするには多少強引な手を使用することは仕方がないことだと考えます。モモンガ様が望むなら至高の御方をここに連れしましょう。彼らが憎いならすべてを打ち滅ぼしましょう。モモンガ様が望むならたとえどのような場所であろうとお供します。すべてはモモンガ様の幸せのために。」

「それは私も同じ」

「ですので私はアルベド様を応援しようと言っています。があくまでその判断はモモンガ様あつてのもの。あなたが勝手に解釈し越権行為であった場合は全力でそれを止めさせていただきます。その範囲を超えないものであれば我々は共犯者となれると思います」

「いいでしょう。パンドラズアクターあなたの話に乗ってあげる。その代わりあなたも私に今日協力なさい」

「もちろんd」

「それは私の思いがモモンガ様に届くようにということよ」

「なるほど、わかりました。モモンガ様にお伺いして、もしモモンガ様が望まれるようであればその恋が成就するように全力で協力することをお約束しますとも。しかしもし

モモンガ様が望まない場合はあなたの恋に協力することはできません」

「それで構わないわ。必ずモモンガ様を私に振り向かせて見せます」

「それでは今から我々は共犯者ということだ」

そういつてパンドラスアクターが右手を差し出せばアルベドもその右手を右手で握り返す。

こうして若干の違いはあれどモモンガを幸せにし隊がここに結成された。



## モモンガ様がアインズ様に

4人での会合の後、3者とも詳細にまとめた行動方針を報告書にまとめてきた。

それこそリアルでは、小卒でしかない鈴木悟には厳しい量と内容である。

しかし、絶対なる支配者であるモモンガなら当たり前のようにこなさなければならぬ仕事でもある。

結果、書類を斜め読みして3人の書類に許可を出したのが3日前。

それから、モモンガは自室にこもり書類を精査する作業に専念していた。

そして、やっと書類の確認も終わり息抜きもかねてアイテムの確認をしていたところ、ミラー・オブ・リモート・ビューイングというアイテムを発見した。

ユグドラシルでは、各プレイヤーは情報阻害の魔法を使用していたので、死にアイテムなのは有名だったがコレクターであるモモンガ一通りのアイテムを揃えていた。

その精神は、宝物殿の領域守護者である、自身の息子にも確実に受け継がれている。

ほぼ確実に使えないだろうとは想像していたが、このアイテムが使用できるということとは情報阻害をしていない、プレイヤースキルかもしくは自己保身に長けていないことは、一目瞭然で相手の力量を図ることもできる。

息抜きの意味も込めてミラー・オブ・リモート・ビューイングを使用して。

ただ、いざアイテムを使用してみようとしたところ、すべてをカーソルで選択していたユグドラシルとは違いアイテムの使用方法がわからない。

そこでアイテムを使用しようとして格闘すること30分やつと映し出される景色が安定してきた。

すると突然部屋から拍手が聞こえてきた。

その拍手の発生源は、執事服を着た上からでも鍛えられていることがうかがえる肉体を持ち、初老ともいえる容貌をしているにも関わらず鋭い眼光を持つ、セバス・チャンである。

セバス・チャンは、ナザリック大墳墓の地下9階層の最終防衛ラインである戦闘メイドプレアデスのリーダーであるナザリック地大墳墓の家令のような立場を与えられている。

ナザリックでも数が少ないレベル100NPCでありながら階層守護者という立場を与えられていない特殊な立場でもある。

「おめでとうございませす。モモンガ様」

「ありがとう、セバス。付き合わせてすまなかつたな」

「主のおそばに控えご命令に従うこと、それこそがたつちみー様によつて執事として生

み出された私の存在意義でございます。」

「そうか」

そう返しミラー・オブ・リモート・ビューイングで、人がいる場所を探していたところ、何やら人が集まり賑やかな映像が映し出された。

「ん、祭りか？」

「これは・・・違います。」

映像を村の上空から、村の中に切り替えて、より詳細に観察してみると、どうやら甲冑を着用して馬に乗った兵士に蹂躪される村だということが分かった。

「どういたしますか？」

「ん？」

モモンガはこの世界に人がいたことでやっといろいろなことが聞けると思っていたが戦闘している中にノコノコ赴くほど愚かではない。

「この世界の人間たちが、どれくらい強いのか測れば、今後の行動の策も立てやすくなるデミウルゴスに連絡をとり、至急彼らの強さを測定するように連絡するか・・・」

そこで、セバスの顔を見ると一瞬表情に陰りが見えた。

その瞬間なぜか彼の創造主であるたつちみーの顔が浮かんだ。

どうやらこの執事は、襲われている村を救うかどうかを俺に尋ねたのだが、俺がこの

村を犠牲にこの世界の戦闘レベルを凶ろうとしたことが、不満であるようだ。

“ たっちみーさんならこの襲われている村をすぐに救いに飛び出していたらどうな”

NPCは創造主に似るのだろうかとかと心の中で思った。

自分は過去にその正義感に救われ自分の居場所を見つけることができた。

その恩を息子のセバスに返すのは当然だろうと、一人考えセバスに尋ねた。

「セバス、意見があるなら発言を許す。忌憚のない意見を聞かせてくれないか。」

「いえ、モモンガ様に意見などあろうはずがございません。」

「セバス、お前は私の目が節穴だとも思っているのか。思っていることを正直に申すがよい。」

「は！大変失礼をいたしました。それでは、僭越ながらこの村を救い、情報を得るといのはいかがでしょうか。助けたことを理由にすれば、ごく自然に村人からこの世界の情報を得ることが可能かと思われます。」

「なるほど、お前が言うことにも一理がある。しかし、敵の強さもわからない状況で行動し、こちらに被害ができればどうする。」

「それは・・・」

「セバス。もう一度言う、建前はよい、本心を述べるがよい」

「は、私の愚かな発言と、モモンガ様を見くびったこと大変申し訳ございません。それで

は本心を述べさせていただきます。．．．困っている人をみると助けずにはいられないのです。」

その瞬間懐かしい雰囲気を感じ、少し心が和らいだ気がした。

「たつちみーさん、セバスは間違いなくあなたの息子ですよ。」

「よい、今回は許す。しかし、今後は己の本心を正直に述べることを心掛けよ。」

「処刑に値する不敬に対して、多大なるご慈悲感謝いたします。偉大なる至高なる41人の御方に誓って今後は正直に発言をさせていただきます。」

「うむ、それではセバスの意見を採用し、この村を救出して情報源とする。」

そうしてすぐさまモモンガはメツセージを発動してパンドラズアクターに連絡をした。

「パンドラズアクターよ、今時間は良いか。」

「これは父上、もちろんですとも。」

「そうか、．．．今すぐに我が居室にぶくぶく茶釜さんの完全装備で来るがよい。」

「いかがいたしましたか？侵入者の報告はデミウルゴス殿からは届いておりますが。」

「いや、ミラー・オブ・リモート・ビューイングにて襲われている村を発見したので、その村を救出するために。お前の力を借りたいと思つてな。」

「なるほど、優秀なタンクが必要ということは、父上が自らご出陣なされる予定でしょう。」

か。」

「そうだ、何か問題が。」

「はつきり言って反対です。敵の戦力がわからないうちは僕達にお任せください。」

「トツプが率先して動かないとお前たち僕に示しがつかないからな。」

「ご意志は固いようですね。承知しました。また優秀なタンクなら私ではなくアルベド殿を推薦いたします。」

「どうしてだ？」

「私ばかりを傍に置かれますと、僕が不公平を感じてしまいますので、なるべく数多くの僕達と交流を進言いたします。またナザリックに存在する僕の中では、ぶくぶく茶釜様の完全装備をした私を除いて、最も防御力に長けるのはアルベド殿です。できればナザリックの最高戦力を揃えてご出陣いただきたいのですが・・・」

「そのような戦力が必要な相手ならすぐに逃走するさ。なにこの世界のレベルを図るにはいい機会だ。」

「アルベド殿とプレアデスをつれてご出陣くださいますようお願い申し上げます。」

「多くないか。」

「父上の安全が一番です。これでもかなり少ないほうです。いざというときにはプレアデスを盾に、戦闘からお逃げください。」

「パンドラズアクターよ、二度とナザリックの僕を犠牲にするような発言をするな。」  
「いいえ、父上の安全のため絶対に譲れません。」

ここで強めに反論したかったが、今もめると村人が殲滅されてしまうので後で話し合うことにして、とりあえずパンドラズアクターの意見を採用することにした。

「わかった。この問題は後で話すとして、お前の進言通りアルベドとプレアデスを連れて行く。」

「私の意見を聞き入れてくださり感謝いたします。」

そのあとセバスには、完全装備でプレアデスに集合をかけるように伝え、アルベドにメッセージを送った。

「アルベドよ」

「は！如何いたしましたかモモンガ様」

「忙しいところすまないが、大至急完全装備にて我が居室まで来てくれないか。戦闘だ。」

アルベドは心中でガッツポーズをしながら表面上では冷静に返す。

「承知いたしました。最短、最速にてうかがわせていただきます。」

「うむ」

5分もしないうちに完全装備のアルベドとプレアデスたちが、モモンガの居室に集合

した。

「突然の招集すまない。我々はこれからここに映る村を救出してこの世界の情報を得るために行動を開始する。だが、敵の戦力がどれほどかわかないためくれぐれも無理はするな。かなわないと思つたらすぐに連絡して撤退しろ。基本的に2人1組以上で行動するように。よいな。」

「「「「「は!!承知いたしました。モモンガ様「「「「「」

プレアデスたちは9階層に敵が攻め込んだときの最終防衛ラインであるが、レベル100であるセバスを除いてレベルは高くはない。

8階層を突破する強者を相手にかなうわけはなく、実質は8階層が最終ラインである。

今までナザリックの8階層を突破してきた敵がいないため、プレアデスたちに戦闘の機会はずいぶん訪れなかった。

なので今回がプレアデスたちの初陣であり、モモンガの護衛という栄誉ある任務を与えられて歓喜にむせび泣かん勢いでこの任務に参加していた。

モモンガは上位転移を使用して村のはずれに門を開いた。

黒い空間を抜けると開けた道路がある森の中に出た。

どうやら問題なく目的地に転移できたようである。



転移して出てきた瞬間モモンガの前に、今まさに剣を振り下ろそうとする兵士と、幼女を胸にかばっている少女を見つけた。

「グラスプ・ハート」

瞬間魔法を発動して兵士を倒せたことに安心した。

自分の得意である第9位階魔法が通じないということとはかなりの強敵でありアルベドとセバスは別としてもプレアデスたちには荷が重い相手ということになる。

「ひい!? 化け物!!」

倒した兵士の後ろにいたもう一人の兵士が、逃げようと背を向けた瞬間さらに位階を落とした魔法を放つ。

「ドラゴン・ライトニング」

モモンガの手から放たれた雷が兵士を貫きその命をまたもあっさり刈り取る。

そこでモモンガは人を2人も手にかけてのに、自分が全く動揺も罪悪感も覚えないことに驚いた。

“やはり体だけでなく心もアンデッドに変異してしまったのだろうか”

「中位アンデッド作成」

モモンガは倒した2人の兵士の死体を使用して2体の中位アンデッドであるデスナイトを生み出した。

「デスナイト達よこの村にいる兵士を殺せ」

「オオオオオオ!!」

そう命令すると2体のデスナイトは、了解したといわんばかりに咆哮をあげて村のある方向に突進していった。

「セバスよ、デスナイトを先行させたので敵の戦力を図りつつプレアデスたちを連れて村にいる兵士たちを排除して村人を救出せよ。兵士たちはできれば生け捕りが好ましいが抵抗するようなら殺しても構わない。プレアデスたちはセバスに従い村人を救出すること。アルベドは私の傍に待機して周囲を警戒せよ。」

「!!!!!!」

そこでモモンガは幼女をかばっている少女が背中に怪我をしていることに気が付いた。

「ルプスレギナよこの少女の怪我を癒してやれ」

ルプスレギナ・ベータは赤毛を二つの長い三つ編みにした人懐っこいかわいい顔をした美人の<sup>ワウルフ</sup>人狼だ。

「承知いたしました、モモンガ様。」

モモンガの指示に従い素早く行動を開始する僕達。

指示を終えたモモンガは少女を観察するとなぜか俺をみて怯えている様子。

モモンガが疑問に思っていると突然アルベドが声を上げながら斧を振り上げた。

「下等生物風情が」

「まてまて、アルベド」

今にも斧をおろして助けた少女たちを殺そうとしているアルベドを止めて質問を試みた。

「お前達は魔法というものを知っているか」

「は、はい。村に時々来られる薬師の、私の友人が使えます。」

「ふむ、どうやらこの世界にも魔法は存在するらしい」

「ならば話は早い私は魔法詠唱者だ。マジックキャスタールプスレギナよ怪我を治療したらこの二人を護衛して村に来るがよい」

どうやら彼女たちの反応からすると骸骨である俺の顔に反応して怖がっているように見える。

もしかしたらこの世界では異種族は一般的ではなく恐怖の対象なのかもしれない。

そう考え、顔を隠してから村に向かおうとして、モモンガの背に二人の方から声が聞こえた。

「あ、あの！助けてくださってありがとうございます。」

「ありがとうございます」

「お、お名前は何とおっしゃるのですか。」

“ふむ、名前か”

俺の名前はモモンガだが、DQNギルドのギルドマスターである自分の名前を堂々と名乗っていると、他のユグドラシルのプレイヤーに狙われそうであらぬ苦勞を背負いそうだと感じた。

が、ギルドアインズ・ウール・ゴウンのものだとばれるのは遅かれ早かれだとも思った。

そこで、

「我が名を知るがよい。我こそがアインズ・ウール・ゴウン」

そう宣言した。

## モモンガ様中二病発症す

モモンガたちが村に足を踏み入れた時にはすでに村のそこかしこには村人と兵士の死体が散乱しており、生きているものは村人と兵士で分けられて、兵士はセバスとプレアデスによって拘束されている。

しかしデスナイトが降伏した兵士を殺そうと暴れているのでセバスがそれを止めているところだった。

「どうやらアインズの命令に忠実らしく兵士を全員殺すまでは止まる様子がない。

「デスナイトたちよ、そこまでだ」

そう発言したアインズの顔には泣いている様な笑っている様ななんとも言えないお面がつけられている。

アインズが命令するとデスナイト達はピタッと行動を停止した。

「我が名はアインズ・ウール・ゴウン。この執事とメイドたちは私の手のものである。骸骨の騎士も私の使い魔で君たちの味方だ。旅をしているところこの村が襲われていたのが見えたのでね、助けに来たものだ。さて、君たちはもう安全だ、安心してほしい」  
だがいまだに動揺している村人を見て

「だが、タダというわけにはいかないそれなりの対価をいただきたい。」

そこで初めて自分たちの命が助かったことが分かったのか、村人たちはほっとした顔で生き残ったことを喜び始めた。

「セバスよ生き残った兵士たちは情報を収集するのでナザリックに連行せよ」

「は!!」

「プレアデスたちは村人の手伝いをしてやれ。じきにルプスレギナが先ほどの少女を保護して現れる、怪我をしているものがいたら手当をしてやれ。アルベドは私の傍に控えるがよい」

そうしてこの村の村長と会談すべく村長を探し、彼の家で対価として情報を欲していることを伝えた。

村長には、俺は僻地で研究していた、世情に疎い魔法詠唱者である<sup>マジックキャスター</sup>と伝えたところあつさり信用して、彼が知る限りのことを教えてくれた。

今アインズがつけているお面はクリスマスに一定時間口グインしていると手に入る通称「嫉妬マスク」と呼ばれるある意味呪われたシングルベル専用装備である。そんな怪しいものを付けた人物の発言を、疑いもせずに信用することから、この世界の魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>が相当な変わり者と認識されているのかとあきれてもいた。

とにかく貴重な情報が入手できた。

まずユグドラシルで使用していた金貨が流通していないことからやはりこの世界はユグドラシルとは別の世界であり、ユグドラシルⅡでもないということが判明した。

しかし金自体はあるので金としての価値はあるし、この世界でも金は希少金属らしいことから、元居た世界とそこまで差異のない世界だと推定できる。

そして周辺国家に関してだが、ここカルネ村とナザリックがある一帯はリエステイゼ王国という国の領土であること。また南北にまたがって存在する山脈の東側にはバハルス帝国が存在していてリエ2つの国は仲が悪く毎年国境付近にある城塞都市エ・ラントル近くの平野で毎年のように戦争をしているらしい。そして両国と国境を挟んで南方にもう一つスレイン法国という国が存在するらしい。

兵士たちが身に着けていた武器にはバハルス帝国の紋章が刻んであったことからバハルス帝国の仕業だと村長は考えているようだが……。リエステイゼ王国とバハルス帝国の反目を狙ったスレイン法国の工作であろうとも考えられる。

ナザリックに送った兵士から情報が引き出せればよいが。

またこの村から一番近い都市はエ・ラントルであり冒険者という職業もあることが判明した。

そんな話を村長としていたら、今回の襲撃で亡くなったものたちの埋葬の準備が整ったとのことで、合同葬儀に向かうように村長を促し自分もついていく。

どうやら村人には死者を蘇生するという選択肢がないらしく、この世界には蘇生魔法が存在しないのか、蘇生魔法を利用するほどのお金がないのかと考えていた。

セバスがこちらを見ているが流石に死者を蘇生までしようとは考えていなし、蘇生魔法がこの世界に存在しない場合面倒なことになるのは目に見えているので首を横に振ることで否定する。

合同葬儀が終わり、村での事後処理を手伝っていたら夕暮れになっていた。

目的も果たしたしそろそろナザリックに撤収しようと考えていた。

しかしプレアデスのリーダーであるセバスと副リーダーであるユリ・アルファ // 眼鏡をかけ知的な風貌に黒の髪の毛の毛を頭の上でお団子にした整った顔の美人メイドで首無し騎士<sup>デユラハン</sup>を除いたプレアデスとアルベド達からはどうやら人間を嫌っている様な雰囲気を感じた。

「人間が嫌いかお前達」

「脆弱な生き物、下等生物、虫のように踏みつぶしたらどれだけきれいになるかと」

元人間の俺としては複雑な心境だが、どうやら種族がオーバーロードになったせいしか考え方まで引つ張られて人間にそこまで愛着を感じられないのも事実だった。

しかし、セバスとユリも異種族であるにもかかわらず人間にも丁寧に接しているし、実際悪いようには思っていないようだ。



どうやら種族の違いではなくカルマ値が大きく影響しているようだ。

セバスとユリはナザリックでも数少ないカルマ値が中立より上の極善、善である。

元人間の俺でさえ人間に愛着を感じないのは種族が変わったのもそうだがカルマ値が極悪の—500だからというのも影響しているのではないかと推測する。

もしそうなら、ナザリックに属する者のカルマ値はほとんど悪よりなので人間に対して敵対的な行動をとることが考えられる。

人間種を嫌悪するだけではないが、侮つたり、敵対的行動をするのは今後の活動的にもマイナスになるので一度どこかでくぎを刺さなければいけないかもしれない。

「だがここでは冷静に優しくふるまえ、演技というのは重要だぞ」

そうして村長に帰る事を伝えようと村長の家に向かっていると、村人と村長が困った顔で話しているのが目に入った。

「どうかされましたか。」

「アインズ様。どうやらこの村に騎士風の者が近づいている様なのです。」

また厄介ごとかと心の中で思ったが乗りかかった船、最後まで面倒を見る覚悟を決め。

「わかりました、村長は生き残った村人たちを村長の家に集めてください。村長は私たちと一緒に広場に。」

「は、はい」

助けてもらえるのかと村人たちは顔を綻ばせて安心し迅速に行動を始めた。

プレアデス達とアルベドに村長を加えて広場で待っていると、馬に乗った集団がこちらに近づいてくる。

「私はリエステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。」

「王国戦士長?!」

どうやら近隣を荒らし回っているバハルス帝国の騎士たちを討伐するために王国から派遣されたらしい。

まあ大分来るのが遅かったがね。

「村長、この者たちは一体誰なんだ。教えてもらいたい。」

「それは・・・」

「それには及びません、王国戦士長殿。私はアインズ・ウール・ゴウン。この村が襲われているのが見えましたので助けに来た魔法詠唱者マジックキャスターです。」

そういうと王国戦士長は馬から降りて感謝の言葉を伝えてきた。

「この村を救っていただき感謝の言葉もない」

このガゼフという男の態度には驚いた。

重要な役割に就くものは自然と人を見下した態度をとるものが多いが、彼はキチンと

馬から降りて感謝をしてきたからだ。

それだけで彼の好感度が上がるといふもの。

「戦士長、周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつあります。」

兵士の一人がそう報告した。

周囲を確認したところ等間隔で村を囲み我々を逃がすつもりがないようだ。

先ほどの兵士と違い彼らの装備が魔法詠唱者のものであることと規模からスレイン  
フランスの神官直轄の6色聖典のいづれかであろうとのことだ。

どうやら彼らの狙いは王国戦士長のようであり、スレインフランスがバハルス帝国を装って行動していたようだ。

今回この村はそのとぼっちりで襲われたようだ。

「ゴウン殿良ければ雇われないか。報酬は望まれる額を約束しよう。」

「お断りする。」

「そうか。」

そう言つてあっさり引き下がり改めてお礼を言つてきた姿を見て好感度がさらに上がった。

そして改めて村を守護することを約束すると、晴れやかな顔をして敵に向かつて出陣していった。

出陣前に戦士長には位置を入れ替えるアイテムを渡したのでこちらの手に負える範囲なら命ぐらいは助けてやろうと考えていた。

戦士長たちが馬に乗って出ていく姿を見て焦る村長だが、村のために敵と戦いに向かったことを伝えて、この間に避難するように村長に伝える。

どうやら王国戦士長は周辺国家最強と言われるほどの強者であり、相手もスレイン法  
国という国特殊工作員であるらしい。

彼らの戦闘を解析できればこの世界のレベルが図れると思いい、戦闘を除いていたが正直拍子抜けした。

周辺国家最強の戦士長の戦闘も脅威を感じるところはなく、せいぜいユグドラシルのレベルに直すと30台ほどとアルベドとセバスは推測する。

また特殊工作員の魔法詠唱者たちが放つ魔法は精々が第二位階魔法であり、隊長らしき人間が3位階である召喚魔法を行使しているだけだ。

戦闘を眺めているとそろそろ王国戦士長にとどめが刺されそうになるので、危険がないことも確認したので位置を入れ替えた。

俺はアルベドのみを連れて戦場にとび、セバスとプレアデスたちは村人の守護に回した。

彼らは突然王国戦士長たちが消えて、現れた我々に驚いていたようだが丁寧になを名

乗った。

「初めましてスレイン法国の皆さん。私の名前はアインズ・ウール・ゴウン。」

名乗った後、敵に降伏を促したが高圧的に接してきたので交渉は決裂したと感じた俺は敵のせん滅を決める。

隊長らしき人間が自分たちで召喚したモンスター“アークフレイム・エンジェル”に命令して攻撃してきた。

彼らの攻撃ごときではパッシブスキルである上位物理無効Ⅳで、レベル60以下の攻撃はすべて無効できるので棒立ちしていたら、アルベドが俺の前に躍り出てきてすべての攻撃をはじめ、攻撃してきた敵を殲滅した。

アルベドもレベル100でありあの程度のことでは傷を負うことがないことは理解していたが、大事な娘が攻撃を受けたことでもかなり頭にきた。

「お前達、私の大事な娘に牙向くとはいいい度胸だ！ただでは殺さんぞ!!」

俺から発した怒気により敵は怯んだが、アルベドは様子がおかしい。

「大事な・・娘。それは愛しているということ？でも娘って・・」

様子がおかしいアルベドはとりあえず放置して、この痴れ者どもにこの世に生まれたことを後悔するほどの苦痛をどうやって与えてやろうかと考えた俺はとりあえず拘束することに決めた。

「魔法最強化・魔法効果範囲拡大化・麻痺」

麻痺を使用したら初歩的な魔法であるにも関わらず誰も抵抗できずにあっさり魔法が通ったことに驚きつつも、このゴミどもをどうしようか考えていた。

とりあえずこいつらは悪魔であるデミウルゴス達のストレス解消の道具として引き渡すしよう。

パンドラズアクターに連絡を取り彼らをデミウルゴスに引き渡し情報を引き出した後はあらん限りの苦痛を与えるように指示する。

この世界での初の戦闘を経験して、ユグドラシルのチュートリアルよりレベルの低い戦闘に拍子抜けしていたら日が暮れたことに気が付いた。

空を見上げるときれいな夜空が見え近くで見ようとフライで飛び上がろうとした。

「モ、アインズ様。私は空を飛ぶことができません。一人で行かれますと困ります。」

「そうか、困ったな今は飛行のアイテムを持っていないし」

そう言つてアインズはアルベドの背中と膝の裏に手を差し込んで抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこである。

お姫様抱っこをされたアルベドは顔を真っ赤にしてうつむいてブツブツ何か小さい声で呟いているがよく聞こえない。

「モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ」

こ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ・モモンガ様がお姫様抱っこ

フライで上空にある雲を突き抜けると、そこにはつかめそうなほどキラキラ輝く空に輝く満天の星、圧倒されるほどの巨大で黄金に輝く満月があった。

リアルにはない自然だけではなく、人口ではない天然の明かりで照らされる大地を見ていると、この光景が現実のものとは思えないほど圧倒される。

「宝石箱の中をのぞいているようだ」

「この世界が輝いているのは、アインズ様の身を飾るための宝石を宿しているからかと」  
そういわれて、普段なら恥ずかしくて悶絶するであろうアインズであるが、夜空のあまりの美しさでテンションが上がりすぎて本来の中二病が起き上がってきた。

「ふ、そうかもしれないな。私がこの地に来たのは誰も手にしたことのないこの宝石箱を手に入れるためなのかもしれないな。」

「お望みとあればナザリック全軍をあげて手に入れて御覧に入れます。」

「ふふふ、この世界にどのような強者がいるかもわからないのか。それでも世界征服なんて面白いかもしれないな」

先ほどの戦闘で調子に乗るアインズ。

この時の会話を思い出して悶絶するのはちよつと先の話。

## モモンガ様想われる

「さて、定例会議を始めます」

先日カルネ村での戦闘を終えて、ナザリックにて情報担当のデミウルゴス呼びだし、アインズ、アルベド、デミウルゴス、パンドラズアクターの4人で一度会議をする事となった。

「会議の前にまず、私は名を変えた。今後対外的には私のことはアインズ・ウール・ゴウンと呼ぶように」

「(ゴ)尊名拝命いたしました。アインズ・ウール・ゴウン様」

「ただしこの名前は対外的にだ。周りに私たち身内の者だけしかいない状況なら、今まで通りモモンガと呼ぶことを許す。」

一瞬ヤギの角がピクと反応した。

この発言に反応したのはアルベドだ。

彼女はフレバーテキストにてモモンガを愛していると設定されている。

ゆえにモモンガの呼称がアインズとなることに反対こそしないが、心中複雑な気持ちを抱えていたが、二人きりの時などはモモンガと呼んでいいと許可され安心していた。



なにより普段はアインズなのに二人きりの時にはモモンガと呼んでいいなど、特別扱いされてアルベドが嬉しくないわけがない。

「ナザリックのもの全員に周知する予定だが、突然私の名前がモモンガからアインズに変わり戸惑う者も出るだろう。さらに外ではアインズ、中ではモモンガなど呼び名の切り替えができないものが出てくると思われる。とりあえず私をモモンガと呼んでいいのはここににいる3人のみとする。」

ピクピクつとヤギの角が更に反応した。

ナザリックの者たち全員に対する特別ではなく、ここにいる3人だけ。

少なくとも女性ではアルベド一人だけという状況に心の中のアルベドが咆哮していった。

「それではデミウルゴスの報告から聞こう。」

「は！それではこちらの資料をご確認ください。」

そこにはアインズがリスクを冒して戦闘してまで得た情報以上のことが詳細に記載されていた。

アインズができることなどリスクを冒さずとも簡単にできるのが、ナザリック最高の知恵者と呼ばれるゆえんである。

そんなデミウルゴスが誇らしいやら、自分が情けないやら、ちょうど半々の感情で複

雑だった。

「さすがデミウルゴスだ。これほどの情報をこれだけ短い間に集められるとは、見事だ。」

「お褒めにあずかり恐縮でございます。もちろんここにいるパンドラズアクターにも十分に協力して貰った結果です。」

「謙遜なさいますな。これだけの情報をこれだけの短期に、素早く集めまとめられたのは、デミウルゴス殿だからです。私などは手伝いをしたにすぎません。」

「うむ、パンドラズアクターの言うとおりだ。素直に称賛を受けるがよい。」

「ありがとうございます。今後一層の忠義を誓わせていただきます。」

「アルベドもこの短い間に、ナザリックの内政と、本来であればデミウルゴスの仕事である防衛の見直しなどを短期にこなしたこと見事な仕事ぶりだ。」

「もったいなき言葉ありがとうございます。」

「そこで私はここにいる三人には、特別に褒美を与えようと思う。」

「そ、そのような。ナザリックに属するものならモモンガ様に忠誠を誓うのは当然のこと、このような些事で褒美など、誠に恐れ多いかと存じます。」

「まあ、待て。信賞必罰は当然のこと。当然失敗したものには罰を、成功したものには褒美を与える。これはナザリック地下大墳墓の絶対の支配者であり、41人のまとめ役で

ある私の義務である。そこで、まずはここに居る三人に褒賞を与えることによつて、部下のモチベーションを引き出そうと思う。まあ、役得だと思え。ちなみにここに居るパンドラズアクターには既に褒美を与えている。」

その発言をうけてアルベドとデミウルゴスはパンドラズアクターに視線を向ける。

「はい、わたくしはモモンガ様より既に何よりの褒美を賜っております。」

「ちなみにそれがどのような褒美なのか聞いてもいいのかな？」

「それは……」

ちらつとアインズを見るパンドラズアクターに頷いて返すアインズ。

「わたくしはモモンガ様より、二人きりの際には父上と呼ぶことを許可していただきました。」

嫉妬で逆上しそうになるアルベドと、ほうと感心したようなデミウルゴス。

つまり褒美とは概念的なものでもよいのだ。

「そういうことだ、お前ら2人も褒美はどのようなものでも構わん。それに、ここでいう必要はない。近々にナザリックのすべてのものを集めて、私の呼称の変更と、ナザリック地下大墳墓の今後の目的を伝える予定だ。その際にナザリックに貢献したものとして3人を表彰する。その時に述べればよい。パンドラズアクターのものには既に知られてしまったがな。ただし、あまり小さなのだとほかの者に示しがつかないため、後の

者のためにもちゃんとした褒美を要求するように。」

「は！承知いたしました。」

「今後の活動方針については、今のままとする。特に大きな変更点はない。ただし私は外部に出て活動しようと思う。」

「な！そ。それは！」

「は、反対です。御身にもしも何かあれば取り返しがつきません」

「恐縮ですが、私も反対させていただきます。」

「うむ、お前達ならそういうと思うていた。だが、情報とは聞いているだけでは身につかないものだ。私が外に出て現地の者たちと触れ合い、交流することは、この世界で生きていくうえでも、今後においても重要な意味を持つ。」

「ほう、そういうことですか。」

なにやら勝手に納得しているデミウルゴス。

「それでも御身を危険にさらすような真似私は反対でございます。」

断固反対のアルベド。

「私も反対ではございますが、必要なことではあることも承知しております。そこでモモンガ様の身の安全の保障さえしていただければ配下の者も納得するかと。」

反対寄りの姿勢を見せつつも、基本的にはアインズの味方をしているパンドラズアク

ター。

「もちろん私もお前たちを置いて先にナザリックから消える予定はない。」

その言葉に、

「そのようなこと、そのようなこと冗談でもおつしやらないでください。モモンガ様がいなくなりましたら私たちは今後いつたいどうすればよいのか。」

「40人の至高の御方がお隠れになられましてから、モモンガ様は最後までナザリックにお残りになられました慈悲深きお方。モモンガ様を置いてどなたがこのナザリックに君臨なされるというのですか。」

「うむ、私もお前たちを置いて消えるのは本意ではない。だからこそ情報は最も大事なものとなる。そのためには多少のリスクを冒す必要があるのはお前たちも承知のはず。なに、私に何かある前にお前たちがどうかしてくるのであろう。」

「は！全身全霊をもちまして、御身は我々ナザリックがいかなる外敵からお守りいたします。」

「それにその会議ではお前たちが知りたがっているほかの40人のことに関しても教えてやろう。」

「!!!」  
「.....」

「それでは引き続き、アルベドはナザリックの運営。デミウルゴスは情報の収集。(ナザ

リックの運営費の補填方法の模索、補充ができないアイテムの作成方法の模索、珍しいアイテムの収集など明らかに一人だけおかしい量の仕事が充てられている)パンドラズアクターは両者の足りないところを補い補佐を頼む。私は冒険者に扮して、現地のもので交流を図りながら情報収集をしようと思う。私の呼称と目的に褒賞授与の会議については追って連絡する。各々その責務を果たすがよい。」

「「承りました。モモンガ様!!」」

モモンガ退室した後、残された3人はそれぞれ情報を交換していた。

「しかし、まさか君がアインズ様にあのような大胆な褒美を要求していたとは思いませんでしたね。」

そういうデミウルゴスの声色にはパンドラズアクターを非難する色が混じっていた。

「そ、そうよ、不敬だわ。」

うらやましくてしょうがない、アルベド。

「私としましては、我々配下の者がアインズ様に甘えたほうが少しでもお心を開いていただけたらと思うてのこと他意はございません。」

平然と自分の欲望を優先したくせに嘘を吐くパンドラズアクター。

「それにアルベド殿も、例の要求をするには絶好の機会なのでは?。」

「そ、そんな!。」

「ほう、例の要求とは。差し支えなければ私にも聞かせてもらいたいものだね。」

「アルベド殿の要求とはごく当然のこと、アインズ様に妃を娶っていただくこと。その第一王妃にアルベド殿を選んでいただくことです。」

「パンドラズアクター！」

顔を真っ赤にして、まんざらでもない顔をするアルベド。

そのアルベドに向けて任せていただきたいと、視線をやるパンドラズアクター。

「そもそもアインズ様はこのナザリック地下大墳墓にお残りになられた最後の至高の御方。いずれアインズ様から他の40人の至高の御方の行方についてお聞かせいただけます。第一に優先すべきはアインズ様の御身。ただこの世に絶対はありません。そこでアインズ様にはお世継ぎをお残し頂ければ万が一にも対応できるとは思いませんか。」

「モモンガ様の御身にもしものことなど想像するだけでも極刑に値する大罪だが、ナザリックの運営を任されたものとして万が一を考え行動するのは当然のことか。・・・そうであればお世継ぎをおつくり頂くのは正鵠を得ているか。しかしなぜアルベドなのかね？この世界の王から侵略して奪うなど、政略結婚など、いくらでも王妃のあてはあるように思うがね。」

「まさか、デミウルゴス様そのような心にも思っていないことを言っ私を試すのはや

めていただきたい。ナザリツクの者たちは外部のものたちを極端に嫌う、いや嫌悪する傾向にあります。そこにナザリツクの外から、その上この周辺国家には人間種の国しかありませんので、人間種から王妃を娶ろうものなら配下の者から反対の声が上がることは必至。そこでナザリツクの中から第一王妃を娶ることで、ナザリツクの者でもアインズ様の妃となれる前例を作る事。アインズ様にも一人だけではなく第二、第三や側室など、娶っていただくための下準備にすぎません。もちろんそのために厄介ごとが増えるのは致し方なき事。」

「さすが、アインズ様がおつくりになられただけはある。もちろん、きみがこれから言いたいこともね。」

「その通りでございます、デミウルゴス殿。アインズ様の王妃を増やしてお子を作るということは、それに付随して派閥もできるということ。このことがナザリツク崩壊の要因になっては問題です。歴史から見ても次代への継承問題は、派閥を作り、国を崩壊させる要因です。そこで我々3人は表では各派閥をまとめ対立するような形を作ります。裏では協力し派閥の数を一定数以上に増えないようにコントロールし、ナザリツクに弓を引く異分子を排除する。これが今後のナザリツクに必要なことだと考えます。」

「アインズ様はオーバーロードであらせられるから、寿命はないが常にサブプランを用意すべきなのは配下として当然の務め。万が一の場合はアインズ様のお子に我々に君



臨いただければこれ以上の誉れはない。それはナザリックが永遠に繁栄するということだ。なんとも素晴らしい響きではないか。ただしそれはアインズ様の身ではなくここにいる3人にしても同じことがいえるがね。」

「そうね、アインズ様がお隠れになる前にその盾になつて果てるは我々配下の誉れ。ならば我々のほうが先にいなくなる確率は高い。ならば我々こそ、その次のものを育成する必要がある。腹心にしろ子供にしろ絶対に信用できる次のものが必要よ。」

「それがお分かりになるのは、ナザリックにおいてはここにいる3人しかいないでしょう。いずれは増やさなくてはなりません、我々3人は絶対の忠誠の元アインズ様を守りしなくてはなりません。」

そういった後、3人はお互いに頷きあつた。

~~~~~

細かい確認をした後、デミウルゴスが会議室から転移した。

「感謝するわ、パンドラズアクター。私が自分から言つても説得力がないものね」

「デミウルゴス殿を説得するにはあれくらい言うべきでしょう。」

「どごういふこと?」

「アルベド殿、私はねアインズ様が望めばなんでもします。」

「それは私も・・・」

「どんなことでもですか？」

「もちろんよ！」

「自ら命を絶てといわれても？ナザリックを滅ぼせと言われても？自分の創造主を殺せと言われても？」

「当然！」

「アインズ様と自分の子供を殺せと言われても？」

「そ、それは!？」

「アインズ様ご自身の命を絶てと言われても？」

「な、なにを言っているの！パンドラズアクター！」

「私は何をおいても、アインズ様を、父上を絶対としています。それがたとえ父上の命をこの手で取るようになるような命令であろうとも逆らうことはないでしょう。もちろん全ての努力を払い、すべての可能性を模索したはてに、そのような手段しかない場合は、ですが。それだけの覚悟はすでにしています。アルベド殿はどれほどの覚悟がおありですか？」

「そ、それは・・・」

「先ほど、デミウルゴス殿には次代といただきましたが、父上のいないナザリックに未練はありません。もちろん父上が生涯ナザリックを守護せよとおっしゃればそれに従いますかね。アルベド殿は私の共犯になると前回おっしゃりましたが、それだけのお覚悟はありますか？」

「・・・」

かすかに顎を引き、首を縦に振るアルベド。

「見くびらないで欲しいわね。パンドラズアクター。モモンガ様の御身が一番。その最後の時まで添い遂げ、傍に居るのはこの私よ。決してあなたではないし、ましては私の子供でもほかのものでもないわ。モモンガ様のおそばに最も長く、最も近くいていいのはこの私だけなの。そのためなら、我が子だろうが、愛するモモンガ様であろうが手にかけて見せるわ。」

「よろしい、これで私とあなたは共犯者ですな。これから我々はモモンガ様に降りかかる、ありとあらゆるすべての問題に対して滅私奉公の精神でお仕えいただきますよ。」

「いいえ、私のこのモモンガ様を愛する心だけはモモンガ様にも穢させはしない。私だけのモノよ。」

「なるほど、まあ大筋では問題ありません。同じ方向を向いている間は最も心強い同志というだけで。父上にもなるべくアルベド殿を愛し続けていただくように私も協力さ

せていただきます。あなたを敵にはしたくありませんからね。」  
「ふん」

そうして二人は前回と同じ、しかし本心からの固い握手を交わした。

## モモンガ様冒険者になる

今モモンガはエ・ランテルの街を冒険者組合に向けて二人で歩いていった。

隣は全身を真つ黒の鎧と角のあるヘルムという見るからに戦士の恰好なのに、身体の線は細く、その胸部には女性の象徴である二つのふくらみが出ている。

モモンガは以前から、肉弾戦をする戦士にあこがれており、もし次のユグドラシルIIがあるなら戦士でキャラビルドしようと考えていた。

なるべく自分の素性が、この世界にいると思われるプレイヤーにばれないようにするために、戦闘方法を変える必要があった。

そこでナザリツクにある武器や防具を試したのだが、うまく使うことはできない。

どうやらユグドラシルの法則が働いているようであり、特定の職業を取得しないと装備できないアイテムがある様なのである。

しかし自分の魔法で生み出したものであれば装備して使うことができた。

これにより自分で全身真つ黒で二本の大剣を背負うマントを装備した戦士が誕生した。

モモンガはアルベドと冒険者チームを組んで現地で活動することになった。

これにはパンドラズアクターの意見によるところが大きい。

前回の会議でモモンガがこの世界で自ら活動することが決まった。

その際にお供には人間に見える僕が必要だった。

デミウルゴスが集めた情報では、この周辺には少なくとも複数の国家が存在するが、そのうち5カ国は人間種が人間種を統治する国家だった。

しかもそのうち1カ国は人間以外の種を認めず、人間種の中でもエルフなどの亜人すら差別をする、人間至上主義国家である。

しかしナザリツクは異業種のみ所属できるギルドであり、僕には人間種は少なく、完全な人間など一人しかない。

モモンガの理由で戦士中二病となったので、お供には人間に見える僕が必要があり、魔法職もあるナーベラルが最適だと意見したらアルベドとデミウルゴスは護衛をつけるなら多少のわがままもしようがないと納得した。

しかしこの人選に真つ向から反対したのは誰であろうパンドラズアクターであった。

まず、モモンガが本来の魔法職ではなく戦士職として活動する以上本来の力の半分も出すことができない。

もちろん本来のスタイルに戻せば問題ないのだが、どうしても本来のスタイルに戻すためのラグが発生してしまう。

もし相手が一撃でモモンガを殺す手段を持っているのなら、ナーベラルが身を挺したところで対した効果はない。

ゆえにお供には絶対的な壁が好ましいこと、例えばどんな攻撃にもHPを残して耐えるなどの特性を持つデスナイトなどが好ましい。

しかし、もちろんアンデッドなどをお供にすることができない。

そこでナザリツクで最強の防御力を誇るアルベドを、パンドラズアクターは推した。

アルベドはLv100NPCであり複数の戦士系職業を収める優秀な壁だ、そのスキル構成も装備アイテムもあらゆる攻撃から耐えるものが多く突然の不意打ちや超火力からでもモモンガを守護することが可能なのは至高の御方の一人である。ピンクぶくぶくの肉棒茶釜を除けば、アルベドしかないというレベルである。

これにはアルベドの生みの親であるタブラ・スマラグティナが、モモンガの嫁としてその容姿はもちろん、モモンガにばれないようにすべての技術を駆使してフレーバーテキストに「モモンガの恋人」という設定を埋め込み、魔法職であるモモンガのために壁役となるタンクとしてスキル構成するなど、正にモモンガのパートナーとして作られたという前提があるが、ここにそれを知るものはいない。

モモンガの理想ともいえる容姿を持ち。

二人でコンビを組んだ場合モモンガを最大限生かすビルド構成を持ち。

そして唯一自分の創造主よりもモモンガを上置き忠誠心を持つ。

そう意図して作られなければ、こうなることはないだろう。

最高の知恵者であるパンドラズアクターは、薄々タブラの真意に気づき始めている。

それほどまでにアルベドというキャラは都合がいい。

もちろんアルベドを推したのは同盟を組んだからでもあるが、一番重要なのはモモンガの命である。

どんな外敵のどんな攻撃からもモモンガを守護できるのはアルベドを置いて他にはないからだ。

アルベドにはナザリックの運営という創造主タブラとモモンガに与えられた役目があるが、そんなことはアルベドの代わりにパンドラズアクターがすればいいことだ。

これによりアルベドとデミウルゴスもその意見を変えて、モモンガが外で自ら活動するには、アルベドを傍に置かなければならいとし、その条件をモモンガに呑ませた。

無事に冒険者組合で冒険者登録を終えた二人は首から銅カッランクのプレートパーを首から下げ、今度は今夜泊まるための宿でチェックインをしていた。

宿屋の主人は二人の首から下がっているカッパーのプレートに視線を向けて、

「宿だな、相部屋で一日5銅貨、飯は・・・」

「二人部屋を希望したい。食事は不要だ。」



「お前さんらはカツパーのプレートだろうが、だつたらここは・・・」  
「先ほど組合で登録してきたばかりなんだ。」

モモンガは宿屋の主人の言わんとしていることは、理解していた。

カツパーのプレートとは駆け出しの冒険者のことであり、要するに未熟者のことだ。

新人は相部屋で先輩冒険者たちと寝食を共にし、戦闘のコツや仕事を覚える。

そうすることが、新人冒険者の生存率を上げることにつながるからだ。

つまり、今モモンガたちは宿屋の主人の親切を無下に行っているはねっかえりのルーキーということになる。

宿屋の主人は苛立たし気にカウンターを叩き、

「一日7銅貨、前払いだ!!」

「それで構わん」

「ふん！部屋は2階の奥だ」

暗に、ここには来たばかりだからカツパーのプレートではあるが、装備からして歴戦の戦士であることなどわかるものはいないのか、などレベルの低さにがっかりしつつも、自分の部屋に上がろうとするモモンガの前に足を出す先輩冒険者。

どうやら先ほど宿屋の主人の行為を無下にしたところを聞いていたらしく、先輩らしく指導しようとしているのだろう。

内心イラつとしつつも、ここでもかわすとなめられると思ひその策にのるモモンガ。

先輩冒険者の足を軽く、さも偶然当たったかのように蹴つたところで、

「おいおい、いてーじゃねえか。どうしてくれんだよ。ンッ!!」

そうしてアルベドの胸部の部分をみて、連れが女だと気づいたのか、

「こりゃあそちの女に優しく介抱してもらうしかねえな」

そのセリフを聞いたアルベドは只得さえ、下等生物人間ばかりの街にいて気分が悪いところに、自分の主人がその下等生物から馬鹿にされたような扱いしかされないことにイライラしすぎて気分を落ち着けることで精いっぱいだった。

「モモンガ様に事前に言われてなければ、この世に生まれてきたことを後悔させたいで、モモンガ様の姿を見れた荣誉で感涙するぐらい教育してやるのに!!」

必死に心を落ち着ける作業に努力していると、

「そうか、お前は俺の連れに優しく介抱してほしいのか」

そう言つて、片手で先輩冒険者の首を直接つかみ、釣り上げたモモンガ。

本来は、格の違いを見せつけるため優しく痛めつけてやろうと考えていたのだが、いやらしい目でアルベドを見たことにより、モモンガの逆鱗にふれた。

「モモン、よしなさい。あなたが軽く撫でたらこいつらなんて即死してしまうわよ」

「それもそうか」

かなりイライラしていたアルベドが。『モモンガ様が私をかばってくれた』ことで機嫌を直して、ここでこいつを殺るのはまずいと、忠告する。

モモンガは壁へ先輩冒険者を投げ飛ばすに留めた。

これでもう絡んでくるなよと、先ほどの自分の怒りに反省しながら周りを睨みつけるモモンガ。

「うぎゃー」

向こうの方で下品な悲鳴が聞こえたと思つたら赤毛髪の女冒険者がこちらにずんずん近づいてくる。

「ちよとちよとちよとちよと、あんたのせいで私のポーションが割れちゃったじゃない、弁償しなさいよ」

「ポーション?」

「私が、食事を抜き、酒を断ち、儉約に儉約を重ねてためた金で今日、今日!買ったばかりのポーションを壊したのよ」

どうやらこの世界ではポーションとはかなり価値のあるものらしい。ユグドラシルではポーション何て消費アイテムだし、特に価値のあるものではなかったが。

「ならば、こいつらに請求したらどうだ?」

「金貨1枚と銀貨10枚よ。いつも飲んだくれてるんだから払えるはずないわよね」

「へへへへへへ」

「ご名答といわんばかりに苦笑いを浮かべる先ほど投げ飛ばされた冒険者の連れと思われる奴ら。」

「あんたらさ、ご立派な装備してるんだから治癒のポーションぐらい持っているんでしよう？現物でも構わないからさ」

「どうやら、この女はいちやもんを付けたわけではなく、本当にポーションが壊れてすぐにも弁償してほしいのだろう。」

「近々大きな仕事でもあるのだろう。」

「金貨1枚に銀貨10枚とはかなりの金額だ。」

「給料に換算すると3か月分近くに相当する。」

「やはり命に係わるアイテムだから、それだけの値がしても必要なのだろう。」

「それに、今日一日後ろからついてくれているアルベドは終始、機嫌は悪くなく、先ほどなんてうっかり殺ってしまうところをフォローしてくれた、そんなアルベドがこの女冒険者になぜか敵意を向けていることに気づいたモモンガ。」

「元はといえば自分のミスから始まった騒動なのだからポーション1個でことが収まるならいいかと、ポーションを渡すことにする。」

「わかった。」

「赤い、ポーシヨン・・・」

「これで問題はないな」

「ええ・・・ひとまずは」

アルベドの不機嫌に焦ったモモンガは外から持ち込んだアイテムを不用意に渡してしまう。

普段なら自分から情報を出すなど、絶対にそんなミスは犯さないモモンガだが、この時は自分の怒りによるミスを犯したことで、そのすぐ後になぜか怒っているアルベドをなだめるために焦っていたのである。

こうしてこの世界に存在しないはずの赤いマイナーヒーリングポーシヨンポーシヨンをうっかり渡してしまったモモンガはアルベドの背中を押して足早に2階の自分たちの部屋に向かう。

~~~~~

「しかし、こんな場所に泊まる必要はなかったんじゃない？モモン」

「そういうな、ルベド。しかしあれが冒険者か、組合という組織に管理され、依頼はモンスター退治ばかり、予想以上に夢のない仕事だ」

本名を名乗ることは情報漏洩の観点から好ましくないので、偽名を名乗る必要があった。

しかしモモンガのネーミングセンスが絶望的だったこともあり、結局モモンガはモモ

ン、アルベドはルベドと名乗ることになった。

ちなみにアルベドは3姉妹の真ん中であり、一番下にはルベドという妹がいる。

こうして二人は、はるか遠くの国から旅をしてきた二人組として、対等な立場な仲間であるというアンダーカバーを作って行動することになったのであった。

「先ほどは助かったぞ、お前が止めてくれなかったら、うっかりあいつを殺していたかもしれない」

「いいのよ、そんなことぐらい」

「しかし、そんな冷静なお前がなぜ先ほどの赤毛髪のあの女冒険者には敵意をあらわにしたのだ」

「そ、それは・・・」

少し間が開いて、

「本当のことを言っても怒らない？」

「ああ、怒らないから言ってみな」

「あの女が私のモモンに近づいたからよ」

「は？」

「だからあの女が、私が・愛する・モモンに・近づいたからよ。あれでも相当我慢したんだから」

どうやらあの時の怒りは嫉妬によるものだと言明したモモンガは、拍子抜けした。

今後は自分がむやみに女を寄せ付けなければ無用のトラブルを呼ぶこともなさそうだと。

しかし、その前にあの先輩冒険者がアルベドをいやらしい目で見た時はかなりイラつとしたがもしかして嫉妬？と自分の心に気づきそうなモモンガ。

案外モモンガが落ちる日も近いのかも知れない。

「とにかく、我々の目標は一刻も早く最高の階級であるアダマントタイトの冒険者になり。各国の権力者とパイプを作ることにある。そのためにはお前の力は必要だ、頼んだぞ相棒」

「ツツツツツ!!もちろん、頼まれたわ、相棒」

モモンガは表向きデミウルゴス達を納得させるため、情報収集や表向きの立場づくりのためと言ってはいるが、実際はモモンガの息抜きためだ。

モモンガがいたりアルでは失われたこの自然あふれる美しい世界を自分の仲間と一緒に見て回る。

正にユグドラシルで自分がしていたことだ。

それもユグドラシルでは感じる事ができなかった5感をフルに使ってだ。

アンデッドのため味覚だけは再現することができず、いまだに食事をする方法は見つ

かつてはいないが・・・

今は仮想空間でしか感じることでできない世界をそれ以上のスケールで感じられる今を大切にしたい、できることなら自分の仲間と共有したい。

アルベドからすれば愛する人との異世界デート、モモンガからすれば気の許せる仲間との冒険。

とりあえず心行くまでこの世界を楽しむことにする2人であった。



## モモンガ様指名される

モモンとルベドは冒険者組合の依頼掲示板の前で立ち尽くしていた。

「うーん、やっぱり文字がわからん」

モモンガは異世界の文字でも解読できる某青い狸を連想させるアイテムを持っているが、今は全身フルプレートアーマー鎧装備なので、取り出すのも装備するのは難しい。

モモンがどうするか、考えている横では、モモンとルベドの立派な装備なのにカツパーのプレート下げて二人に野次を飛ばす冒険者たちにイライラするルベドが必死に内なる自分と戦っていた。

文字が読めないので、一芝居打つことにしたモモン

おもむろに1つの依頼を手にとるとカウンターに座る受付に差し出した。

「これを受けたい」

「申し訳ありません、こちらはミスリルプレートの方々の依頼でして」

「知っている」

「ん!?!」

「だから持ってきた」

ざわつく冒険者たち

「ですが、規則ですのうで」

「下らん規則だ」

「仕事に失敗した場合、多くの人命が失われる可能性があります」

「ふん、私のなりは戦士だが魔法も使える、それも第三位階魔法までがだ。その上この国の王国戦士長と剣でやりあっても負けないだけの戦闘力もある。私の連れは女だが肉弾戦にかけては私など足元にも及ばないほどの戦士だ。」

「は!? あいつ何言ってるやがる剣で王国戦士長とやっても勝つ自信があつて、その上第三位階魔法まで使えるだつて? そんなのハツタリにしてもよく言えたもんだ」

「その上女の戦士が自分よりも肉弾戦が強いだなんて、それじゃあ王国戦士長よりも強いつてことじゃあねえか。」

あまりにも荒唐無稽なモモンの発言に一気に胡散臭いものを見るような目で2人を見る周り。

「私たちは実力に見合った高いレベルの仕事を望んでいる」

「申し訳ありませんが、規則ですのうでそれはできません」

「そうか。それでは仕方ないな。ならばカップのプレートで最も難しい仕事を見繕つてくれ」

「はい、かしこまりました」

何とかごまかせたと安心したモモンに声をかけてくるものがいた。

「でしたら、私たちの仕事を手伝いませんか」

「うん？」

モモンとルベドが声の方を向けば4人の男たちがいた。

~~~~~

場所を共有スペースから会議所に変えたモモンとルベドと先ほどの4人組の男たち。

いや、正確には3人と男と男装をした1人の女の4人組だ。

彼らは漆黒の剣という4人組のアイアンのプレートの冒険者だ。

リーダーのペテル、レンジャーのルクルツト、ドルイドのダイン、そして魔法詠唱者

のニニヤ。

突然、ルベドが横でまた不機嫌になりだしたのでどうしたのかと聞いたら、このニ

ニヤと名乗るものが女だという。

仕方なし俺が信頼する相棒はお前だけだから機嫌を直せと伝えたら、おとなしくなっ

た。

そしてこのニニヤと名乗る少女はスベルキャスターという二つ名持ちらしい。

この二つ名持ちには有名であることや、功績をたたえるためにつけられることもある

がもうひとつ、強力なタレント持ちに対しても付けられることがある。

このタレントとはユグドラシルには存在しない「武技」とは異なるこの世界特有の技能らしい。

おおよそ1000人に一人の確率でこのタレント持ちは生まれてくるらしいがその能力は様々だ。

「水を甘いものに変える」という何の意味があるのか訳の分からないはずれから「あらゆるアイテムを使用可能」などの超当たり等様々なものがある。

ちなみに後者のタレント持ちはこの街に住むンファイレア・バレアレという少年らしい。

是非とも保護してそのタレントを調べたいところではある。

そしてこのニニヤは魔法適正というタレントがあり、魔法の習熟速度が通常の2倍になるといふ、タレント持ちらしい。

「なるほど、彼のことを知らないということはこのあたりの人ではないんですね」

「ええ、ここには昨日ついたばかりなんですよ。」

「それで、今回の仕事の話なのですが、このエ・ランテル周辺に出没するモンスターを狩るのが目的です」

「モンスター討伐ですか」

「ええと、実のところ依頼された仕事、と言うわけではないんです」  
「というと」

「仕留めたモンスターが強さに応じて、町から組合を通して報奨金が出ますよね？それが今回の報酬になります」

「俺たちの飯のタネになる、周囲の人間は危険が減る、損する人間は誰もいないって寸法さ」

「まあ、そういうわけで。ここから南下したところにある森の周囲を探索することになります。どうでしょう、私たちに協力して貰えますか？」

「どうやら彼らはかなりのお人よしらしい。」

「仕事がないからこそ、こんな地道で稼ぎの少ない、危険なモンスター討伐をしている。我々の力をあてにするにしても、我々はカッパのプレートだ、先ほどの口上も、もしかしたら口だけかもしれない。」

「足手まといになり、チームを危険にさらす危険だつてある。」

「そんな、我々を見かねて救いの手をこうして差し出しているということは、打算がないとは言わないが相当なお人よしである。」

「そんな人の優しさが身に染みるモモン。」

「昨日からトラブルが続いていただけあつたほっこりできた。」

「もちろんです。こちらこそよろしく」

「「はあ!!」」

喜びの表情を浮かべる4人

「では共に仕事を行うのですし、顔を見せておきましょう。おい」

そう言ってヘルムをとるモモンとルベド。

モモンは黒髪にくたびれた顔をした地球で言う東洋系、はつきり言って普通である。しかし、ルベドはその頭に角はないがツヤやかな黒髪を流した絶世の美女。

恐らくこの世界でも、王族などごく一部の人間しかお目にかかれなような美女だ。もちろん彼らの顔は魔法によって作られた幻影だ。

モモンはリアルな鈴木悟の顔そのものだし、ルベドは角がないだけでほとんどそのままだ。

そうしたほうがいろいろとごまかしやすいからであるし、楽だからだ。

「南方にモモンさんのような顔立ちが一般的な国があると聞きました」

「惚れました、一目惚れです、付き合ってください」

突然大声で求婚しだしたルクルット。

「ごめんなさい、わたくしは既に心に決めた方がいますので」

そう言ってモモンの方を見るルベド

「お二人はどのような関係なのですか？」

「仲間です。しかし私のかけがえのない仲間です。もし軽い気持ちで声をかけているとすれば無事に済むとは思わないでいただきたい。ルクルットさん」

「心配しなくても私はモモン一筋なんだから」

その発言で何かを感じたのか素直に謝罪するルクルット

「軽率に求婚したのは謝罪します。しかしルベドさんの美貌は、この国の黄金と呼ばれるラナー王女に勝るとも劣らない美貌、そんな方を前にして何も失礼というもの。」

「同じ男としてその気持ちはわかりますが、相手を見て発言しないと手遅れになるかもしれませんよ。とまあ、我々の容姿はこの辺では珍しく、二人とも異邦人だと知られると厄介ごとに巻き込まれるかもしれませんので、こうやって隠しているんですよ」

そう言つてヘルムを被るモモンとルベド

「はいはい、それに二人の間にはどうやら俺が入る隙間なんてなさそうなのでね」

「仲間がご迷惑を」

「いえいえ、お気持ちは理解していただきますので」

「それでは出発しますか」

「ええ」

そうやって会議室を出て階段を下りていく一行に声がかかる

「モモンさん、ご指名の依頼が入っております」

「一体どなたが」

「ンファイレア・バレアレさんです」

さりげなく前に出ようとすするルベドを手で制すモモン

「初めまして、僕が依頼させていただきました・・・」

「大変申し訳ない、私は既に別の仕事の契約を交わした身。光栄なお話だとは思いますが・・・」

「モモンさん、名指しの依頼ですよ」

「そうかもしれないませんが、それでも先に依頼を受けたほうを優先するのは当然でしょう」

「しかしせっかくの指名を」

「であれば、どうぞでしょう、バレアレさんのお話を聞いてからというのは」

そうやって先ほど出たばかりの会議室に一人増えて戻る7人

~~~~~

どうやら仕事の依頼とはカルネ村までの護衛とその周辺での薬草の採取らしい。

先ほどまで話題に出ていた有名人からの、それも直接の依頼とあって警戒していたが、どうやら昨日私が宿屋で起こした騒ぎを見ていた冒険者からかなり腕の立つカッ



パーの新人がいるらしいと聞きいたらしい。

丁度鼻頂にしていた冒険者がいなくなつたこともあつて、噂話の話のタネに依頼をしたということだ。

はつきりいつて胡散臭いことこの上ない。

自分の命を守る依頼をカッパーだから安く済ませる、何てくだらない理由で、噂話を聞いただけの新人に依頼するなんてことをすることはしない。

恐らく本当の目的は別にあるものと思われる。

俺の素性を怪しんで探りを入れているのか、遠方からの異邦人とあたりを付けて貴重なアイテムや情報が欲しいのか。

とにかく、彼の本当の目的がわかるまでは警戒する必要があるのは間違いない。

この少年の目的を知るためにもこの依頼を断るのは下策、とはいえ我々は2人とも薬草採取のスキルを所持していないため依頼達成に不備が生じるかもしれない。

そこで

「ペテルさん、我々に雇われませんか？」

「とどうと？」

「警護任務となれば、レンジャーであるルクルトツトさんのような方が必要になるし、森での採取となればドルイドであるダインさんがいたほうが効率が良いのではないでしょ

うか」

「モモン氏の慧眼お見事である」

「こつちは全然問題ないぜ」

「ありがたい申し出です」

「僕の方もそれで問題ありません、あと4人ぐらい増えてm・・・」

「もちろん、私たちを雇うのはバレアレさんであり、漆黒の剣の皆さんを雇うのは私です。漆黒の剣の皆さんの報酬は私の報酬の80%でいかがでしょうか」

「そんなにいただけません、せめて半分半分で・・・」

「まあ、お待ちください。我々2人は戦闘では不安はありませんが、護衛任務や薬草採取などの任務は得意ではありません。それに先ほど誘っていただいた先約の依頼を断るのですから迷惑料も込みということに納得ください。それにせっかく安くしようとしているバレアレさんの目論見を私の一存で負担を増やしても、それはこちらの本意ではありません。あなたたちは実をとり私たちは依頼達成という名誉を得る。バレアレさんは依頼金を抑えることができる誰も損することはない。もちろん道中現れたモンスタを倒した報奨金の取り分も我々が2でそちらが8構いません」

「そこまで、気を使っていたら必要は・・・」

「なあに、本来アイアン級の冒険者4人への依頼金としては少ないのですから、それぐら

いは気にせず。その代わり我々にできないところでのサポートをお願いします。」  
「わかりました。全力で当たらせていただきます。」

こうして臨時編成した6人でのンフィーレア・バレアレさんの護衛と薬草採取の任務が決定した。

~~~~~

馬車を引く御者はバレアレに任せ、先頭の前列目はレンジャーのルクルットとペテルに任せ、2列目に馬車の脇をマジックキヤスターであるニヤと魔法も使える戦士のモン、最後方の3列目はダインとルベドという体型でカルネ村までの街道を進む。

道中休憩などを挟みながら進んでいるが特に問題はない。

道中で森の賢王という人語を理解するというユニークモンスターの話題や、この世界特有の魔法の話などもしながら進んでいるとルクルットが突然警戒を促した。

「動いたな」

「どこだ」

「あれだよ」

ルクルットが指をさしたほうからオーガやゴブリンなどの群れがこちらに向けて進んでくる姿が見える。

「モモンさん役割はどうしましょう」

「漆黒の剣の皆さんはインフィーレアさんの周りで護衛をお願いします。前方から見える敵は全て私とルベドが対処しますので皆さんは漏れてきた敵や後方からの伏兵の警戒をお願いします。もし伏兵が手に負えない場合はすぐに合図をしてください。私がそちらに向かいます。」

「わかりました」

そう言つてペテルは指示を周りのメンバー達に出していく。

そんな中、まるで散歩するような自然な足取りでオーガやゴブリンの群れに向かう二人。

「背中任せたぞ、相棒」

「ツツ！もちろんよ！相棒」

「なるべく向こうに漏らすなよ」

そうして2つの大剣を軽々振り回し一刀のもとにオーガを切り捨てるモモン。

そんなモモンの死角からの確に敵を攻撃しこれまたバルディツシュで一撃のもと絶命させるルベド。

二人のコンビネーションは完璧で敵がペテルたちのほうに抜けてくる様子は全くない。

むしろ敵は2人の強さに恐れを感じて逃げ出そうと伺っている感じがある。

そんな雰囲気を的確に感じたモモンは何匹かのモンスターが背を向けて逃げ出そうとした瞬間。

「ルベド!!」

この一言でモモンの意図を理解したルベドはモモンの前に出て敵をブロック、スイツチした隙に逃さず剣を地面に刺し、素早く魔法に切り替える、無詠唱でのライトニング、直線的だが敵への到達までが早く、低位階のため無詠唱でも威力が落ちにくく回転も速い、逃げる敵を討つのに効率的な魔法だった。

しかし、他の面々はとでもではないが信じられなかった。

先程見たオーガを一刀の下に切り捨てた剣技だけ見ても王国戦士長に匹敵するのは疑いようがないことである。

なのにそもそも第3位階までの魔法が使えるのだけでも天才と言われるのに、その両方を最高レベルで納めるこの目の男は何なのだ。

連れのルベドも明らかに戦い慣れていた、そもそもバルディッシュという武器自体が敵を斬り殺すのではなく鎧の上から叩き殺す為の超重量武器である、それを軽々振り回し、あまつさえ敵を斬り殺すほどの速度をも出す。

それ場面よっては片手でも同じように扱っている。

力だけ見れば確かにモモンをも超えるかも知れない。

と言うことはモモンより肉弾戦では上と言うあの発言も真実見を帯びてくる。

「これで敵は殲滅したかな」

「ええ、間違い無いと思うわ」

一方後ろでポカンとしている面々をみて

「皆さんどうしましたか？」

その発言で、一斉に歓声を上げる

「モモンさん!!本当に凄いです。どこでそれだけの技を?」

「そもそもあれだけの剣技を持ちながら、魔法まであれだけ自在に扱うとは」

「いやー、ルベドさんの動きも凄かった。全身フルプレートアーマー鎧を装備しながらバルディツシュまで

持つてるのにその動きは明らかにモモンさんより早かった。」

これにはいくら戦闘が素人のソフォーレアにも不味い事をしているのはわかった。

彼の真の目的は、昨日彼の祖母が営む薬屋にポーションを持ち込んだ赤髪の冒険者が見せた赤いポーションを持つていると言うモモンを調べることにある。

しかし、その調査対象がこれほど規格外の人物なら話は変わってくる、これだけ偉大な相手の痛く無い腹を探るような真似をする相手を許してくれるだろうか?

下手をすれば逆鱗に触れ殺されてしまうかもしれない。

それだけ危険度が上がったと言うことである。

周りからの称賛を受けるモモンたちだが、彼らにとつてはユグドラシルでのチュートリアルよりも難易度の低い戦闘である、それに対して称賛されたとしても、当たり前過ぎて特に感じることは無い。

「何たいした事はありません。私に剣技などありません。ただ力任せに振り回しているだけに過ぎません。魔法も専門職に比べればレベルが劣るもの、私より凄腕の剣士も魔法使いも沢山いますよ」

これは真実である、モモンはロールプレイ優先のロマンビルドでありガチビルドのプレイヤーに比べれば劣る。

実際モモンガのユグドラシルでの強さは中の上か良くて上の中、そんなモモンガがユグドラシルでPKで7割の勝率を誇ったのは事前に準備したからだ。

それでも負ける相手には負ける。

「なあに、これぐらい皆さんなら軽くこなせるようになります。」

その後一行は道中で野宿をする夕食の際、モモンは困っていた。

食事をとれば、身体が骨だけのモモンから摂取した食事が駄々洩れするからだ。

何とか宗教上の理由ということで食事をすることを回避したモモン。

話題は冒険者チームのこととなる。

「冒険者の皆さんってこんなに仲がいいのが普通なのですか？」

「ええ命を預けますからね」

「それにチームとしての目標もすっかりしたものがありませんし。」

「みんなの意思が、一つの方向を向いていると全然違いますよね」

「モモンさんもチームを？」

「冒険者・・・ではなかったですがね。かつて弱くて一人だった私を救ってくれたのは純白の聖騎士でした。彼に案内されて初めて仲間と呼べる人たちと出会ったんです。素晴らしい仲間たちでした。そして最高の友人たちでした。彼らと過ごした日々は忘れられません。」

「アインズ・ウール・ゴウン俺の輝かしい全てで、唯一の居場所・・・」

「モモンさん・・・いつの日かその方々に匹敵する方々と出会えますよ。」

「そんな日は来ませんよ」

はつきりとした口調で否定するモモン。

モモンも自分の失言に気づき気まずい空気が流れていることに気づいたが、吐いた唾は呑めない。

「すみません、私の失言でした。それに今の私にはルベドという相棒がいますからね。」

フォローはしたが結局気まずい空気が変わることはない。

次の日一行は気まずい空気のままにカルネ村への道のりを進んだ。